

エビクラゲ



最初に田辺湾で出
合ったエビクラゲ
(白浜町臨海で)

久保田 信

9



田辺湾で見つかる鉢クラゲ類の中でとりわけ大形種は、2種が知られている。その一つがエビクラゲである。傘径30センチにも達する。

本来は傘のてっぺんにイボ状の突起があるが、画像の個体ではてっぺんがへこんでいて見えていない。ブロッコリーのような口腕が8本あり、薄紫色の地に褐色の斑点が多数あり美しい。口腕からは長い触手が伸び出すことがないのも特徴である。

和名は、クラゲモエビという小エビがよく共生しているので付けられた。若いクラゲが沿岸で生まれ、漂流しながら成長する。この過程でクラゲモエビがすみ着くのだが不思議である。

田辺湾とその周辺での遭遇は、過去20年ほどで、わずかに3例だけ。今から半世紀ほど前のクラゲの記録でも、京都大学瀬戸臨海実験所職員を

されたこともある。最初に田辺湾で出合ったエビクラゲ(白浜町臨海で)

プランクトン学者の山路勇博士がまねたと記されている。私が最初に遭遇したのは2001年5月18日で、田辺湾内で船のそばを浮遊している新鮮な個体を採取した。この個体にエビ類はいなかったが、イボダイの稚魚が共生していた。2番目の個体は、02年10月9日に番所崎のタイドプールにいた傘径30センチの大型個体で、地元の方が発見し届けてくださった。飼育したが、1カ月ほどで死んだ。3個体目は04年11月8日、地元の方が田辺湾入り口付近で発見し届けてくださった。

エビクラゲは「鳴門潮」と呼ばれる瀬戸内海から田辺湾へ流入する海水の指標となっている。地元漁師から、鳴門潮が田辺湾に入ると潮は濁って漁獲が少なくなると聞いた。

瀬戸内海に多産する種であるが、若い姿のポリプがまだ見つかっておらず、生活史が解明されていない。謎の多いクラゲである。

(京都大学准教授)